

ブラジル日系人の短歌

はじめに

三つの歌碑からさかのぼってブラジル・コロニアに短歌の濫觴を訪う。小稿はブラジルに於ける日本の短歌の移植についてその歴史的、社会的な背景を考察し、ブラジルにおける短歌の持つ意味を考察することを目的とする。

I

奈良県斑鳩町法輪寺の近くにある「ふれあい交流センター」に田原本町法貴寺出身で在サンパウロの歌人梅崎嘉明さん(大正十二年生)の歌碑除幕式が行われたのは、二〇〇二年四月十七日のことであった。ブラジル産の黒御影石に刻まれたのは、

とつくにに住めばはるけき人恋ほしましてまほるば大和し恋ほし

在ブラジル 梅崎 嘉明

望郷の歌である。当日は小雨の降る中、奈良県副知事、奈良県海外協会、斑鳩町議会、日本の短歌誌「歩道」、「房」などの関係者、大学関係では猪股静弥氏、鈴木昭一氏に筆者、ブラジルからも歌友四人、梅崎夫妻、弁護士の子、歯科医である娘さんの家族、一家六名が集まり、除

阿尾時男

幕式の後センターで祝賀会が挙行された。事の発端は、在伯奈良県人会が二千年の年に創立四〇周年を迎え、その記念にブラジルの黒御影石二個(三トン)を県に贈った。「奈良県海外協会」は、その一つを初瀬川修復を記念して「はせがわ展望公園」に日伯友好の文言を刻み後世に残す事とした。後の一つが望郷の歌碑建立の経緯である。

梅崎嘉明(以下すべて敬称を省く)は後述するブラジルの歌誌「椰子樹」同人であり編集にも携わり、総合同人誌「コロニア文学」に係わり同「コロニア詩文学」(現「ブラジル日系文学」)の代表であり、という如く、これまでの人生の半分はコロニア(日本では耳なれないこの言葉は移民の人達の住む社会とかその集団を指す意味で日系社会では極普通に使われている)における文芸活動と共にあった。昭和七年九歳でブラジルに渡った準二世の(幼い時に渡伯した者をいう)梅崎にとっては文芸は民族の血たる日本語獲得の最善の途にしてそれは同時に日本帰の途でもあった。異国に於ける自らのアイデンティティーを確認する方法であったのかもしれない。梅崎を初めとしてブラジル日系人の中には真摯な態度で長年研鑽を積み、歌人としては相応のレベルに達し、個性ある独自の世界を作り上げた人は意外なほど多いと言わねばならない。ただ、惜しむらくは準二世の方々でも八〇歳になんなんとする現状を考えると、やがて異国の大地に消滅していく文芸であることは否定できない。

この点に於いて、歌碑の持つ意味は大きい。名誉欲から自分の功績を石に刻むのとは本質的に異なる。大げさに言えば、それは異国に消え行くことへの拒否であり、民族の言葉・日本語すなわち血脈としての精神の継承となるであろう。碑はひとつの時代をこのような人々が居てこのように人生を生きたのだという確かな生の証（あかし）であると同時に、いつか後世の人々に共感と勇気を伝達する契機となるに違いない。筆者が拙稿を歌碑から書き起こした理由も偏にその点にあった。

「梅崎、よかったなあー」と彼の亡き恩師武本由夫の声を聞く思いがした」とは、梅崎の歌碑除幕式に立ち会うためにブラジルからやって来た歌友藤田朝壽の言葉である。藤田は「ブラジル日系文学」二〇〇二年十二月号に、この除幕式の感動を「大和まほろば」という随筆に書いている。梅崎の短歌の師は、その言葉の通り武本由夫であった。

II

武本由夫はコロニアの名編集長ともいうべき逸材で、「椰子樹」創刊に参画し、「コロニア文学」の編集長を務め、「コロニア詩歌」を創刊し、「コロニア小説選集」の出版に尽力し、「コロニア万葉集」刊行の選考委員を務め、「日伯新聞」等歌壇選者としてこれまで幾多の人材を育成するなどその功績は計り知れない。武本の文芸上の功績は、実作者というよりそれ以上に編集者、批評家、文芸指導者、教育者としての面に於いて評価されるべきものが大であって、その人間的魅力からくる人脈の広さを一助として経営面で苦慮すること多き文芸の灯を、ともすれば出稼ぎ根性の抜けない所謂「一旗揚げて故郷に錦を飾る」という意識が横行していたコロニアの土壌で実によく守り抜いた点にある。武本に兄事していたサンパウロ在の評論をよくする安良田済は、武本由夫の歌碑除幕式の挨拶で彼を称して「文学の鬼」と呼んだ。確かに、武本ほどその

一生を日本語だけにかかわって生きた人物を見出すことは難しかろう。コロニアに於ける他の文芸人は、当然のこと文芸以外に生活を他の職業によって成り立たせてきた。武本は、人生の節々でこれで良いのかと自問することを繰り返しながらも、結局、文芸以外の生活を意志的に拒否することを彼自身に課したのだった。コロニアの文芸にのみ情熱を燃やして一生を送るといふ、誠にいさぎよい見事な生涯であった。生前は些かの反発を覚えた人々をも含めて、彼の死後、彼を知る人達すべてが、彼の生き方のなんと見事なものであったかを思い知ることになった。

砂丘にまろびて輪晦を愉しめば海よりそよぎて朝は流るる

武本 由夫

この一首の歌を後述の武本の歌碑に選んだ人達の達意の目には敬意さえ覚えさせられる。真に武本を知る者には象徴的でさえある。武本由夫は、常にコロニア短歌の革新を志向し果たせずに逝ったきらいがある。「コロニア的」であることを希求し、コロニア短歌が日本詩歌の残滓であったり、その影響下にあることを嫌っていた。文学というものを時代と風土の所産とみなし、風土にしっかりと足を下ろした生活者の詩歌、土着的情緒を根底とするものでなければならぬと考えていた。しかし彼は実作者としてはそれを果たせず、内心忸怩たるものを好きな酒に紛らせていたところがあつたのではないかと、筆者は推測しているが、長年コロニア文芸の指導者という立場にあつた武本としてはコロニア独自の自立した文芸を創り上げねばならないという強烈な使命感を抱いていた。

審くもの誰にかあらん黄に誇る菊が悖徳の涙流すに

武本

この歌などは前衛意識というものをめぐって、ずいぶんとコロナ歌壇に話題を呼んだ作品だと聞いている。しかし本稿は短歌論にわたる部分についてはその目的としていないので、これらに関してはまだの機会に譲りたい。

今から三二年前になろうか、いささか私事にわたるが、若き日にブラジルを訪れた筆者は、用事もないのに日課のごとく「日伯文化協会」の鰻の寝床のような細長い室を訪れていた日々がある。いや、日本語普及会の奥の一隅であったか。とにかく室の一番奥に事務机を据えて武本は当時「コロナ文学」の編集の仕事をやり、手前の机では短歌人の陣内しのぶが編集の補助をしていた。彼が主任となって編纂したコロナ版「日本語教科書」全十一巻も記憶にある。訪問している時にも、遠くからいろんな人達がこの狭い室へ立ち寄って来るのだった。会費を届けに、或いは原稿を持参し、或いは久闊を叙すために、という具合であった。自分などは毎日のように仕事の邪魔をしに行っていたようなものなのだが、武本は暇を見ては自分をサンパウロ大学の鈴木梯一教授の研究室に連れて行ってくれたり、「スザノ詩話会」がある時には一緒に行こうと誘って数台で行く車の中の一員に加えてくれたりした。往時茫々とはいえず、鮮烈なる印象はつい昨日の如くである。

武本は一九八三年一月二日に没しているが、死後二〇年目の命日に彼の弟子達によって歌碑がサンパウロ市にある東洋街リベルダーデ区アルメイダ・ジュニオル広場に建立され、遺族、友人など七十人が集まる中、今年二〇〇三年一月二日除幕式が執り行われた。前述の一首がそれである。

この歌碑には、野尻アントニオのポルトガル語の翻訳がついたことは土地柄というより時代の所為というべきであろう。ブラジル日系人の人

口が百三〇万人といっても、殆ど三世四世の時代になっているのだからそれもよしとすべきである。「日系文学会」代表の梅崎嘉明、安良田済水本すみ子等、歌碑建立の中心になったのは、武本由夫を歌の師と仰ぐ人達であった。その直後引き続いて、武本にとっては初めての著作集「短歌・エッセイ論文集 武本由夫著作抄」がやはり彼等の手によって出版された。歌碑建立に賛同する人達の募金に残が出たのが、それに充てられたという。

武本は一九一一年（明治四四年）岡山県赤磐郡熊山村に生まれた。岡山県立閑谷中学校を卒業したその翌年一九三〇年（昭和五年）に、ラプラタ丸で渡伯した。サンパウロ州ノロエステ線、ルッサンビーラ駅、第一アリアンサ移住地に入植している。武本自筆のメモによると、二年後「アリアンサ短歌会」に参加。岩波菊治に師事す。同地の短歌俳句誌「おかほ」「日伯新聞歌壇」（岩波菊治担当）、日本の「アララギ」などに投稿す、となっている。

武本由夫が移民した頃の日本はどのようなようであったか。実は大雑把ではあるが簡単に見ていくと、一九二七年（昭和二年）の金融恐慌。一九二九年（昭和四年）の世界大恐慌。日本の経済は混乱し失業者が増大する米、生糸の暴落。追い打ちをかけるように東北地方、北海道を冷害、凶作が襲ったのが昭和五年。すなわち武本がブラジルに渡った年のことであった。石川達三の芥川賞受賞作「蒼氓」を読めば、その当時の移民の状況などいろんなことが分かるが、奇しくも武本が乗船した「ラプラタ丸」（船は同じだが出港は武本乗船の半年余り前の三月十五日神戸出港）に石川達三は移民助監督として乗り込んでいたのである。石川達三の乗った船には約九〇〇〇人の移民の人達がいた。香山六郎「移民四〇年史」を開くと、移民人員数は昭和初めから急に増加するが、金融恐慌の年には一気に倍近く年間一万人を越え、増え続けて昭和八年、九年には二万

人を越える移民が海を渡っていることが分かる。日本政府が国策として、ブラジル移民を送り出していたわけだが、その後、ブラジル移民数が急速に減少していくのは、日本が満蒙開拓移民に方向転換したためとブラジルが外国人移民制限政策をとった理由に拠るのであろう。また日本が第二次世界大戦に突入してからは、遂に日伯国交断絶の時代を迎え、移民空白の時代を迎えることとなる。ブラジル移民の増加は、日本の不況、農村の悲惨な状況がその背景に要因として大きくあったわけだが、武本由夫が船に乗った状況は少し違っていた。

武本は生活に困っていたわけではない。他の移民達のように貧困を抜け出しなんとか今の生活を打開したいという切実な気持を抱いてブラジルに渡ったわけではなかった。当時の武本は旧制中学を出て家でぶらぶらしていた十九歳の独身青年だった。その頃に同じ熊山村（現在熊山町）出身の人で台湾に住んでいた人が村に帰郷し、今度息子夫婦がブラジルに行くことになったという話をした。それを聞いた武本の父が、お前も一緒に連れて行ってもらったらどうかと勧めたことで、その山田さんとかいう夫妻についてブラジルに渡ったという経緯がある。渡伯後三年で資金を使い果たした山田夫妻が日本に帰国することになり、武本にも一緒に帰らないかと訊ねる。武本は、もう少しブラジルに居て見聞を広めてから帰ると言い、そのまま異国に住み着いてしまう。まことに牧歌的な話の次第であった。

牧歌的と言えば、その後の武本の生き方にもそれは感じられる。山田夫妻と別れひとりになった武本は、毎朝起きると、エンシャード（鋤）を倒し、倒れた方角の家に向かって歩き、そこで仕事はないですか？と訊く。そんなことで仕事を断られたことはなかったというばかりか、武本が何時自分の家に訪ねて来るか近在の人達は皆面白がって心待ちにしていたともいう。コロナで彼を知る人達の間では有名な話である。

ここに移住地アリアンサの「アリアンサ」たる所以があるのであってそれはコロナ文芸の発祥の地となる必然性もアリアンサという「移住地」に潜んでいたようだ。それについては、武本由夫が師事した「アララギ」の歌人岩波菊治の歌碑の項で触れたい。

結局、武本は五年間ほどの移住地に若き日を送り、サンパウロ市に出ることになるのだが、この地で彼は短歌と出逢った。日本にいた中学時代には、とくに短歌に興味を抱いていた形跡はまったくないといつてよい。武本が短歌に近づいたのは、移住地に同じような年頃の若者、中江盛治、樋田徳重がいて（生涯の友となる）彼等が、歌の手ほどきのようなことをしたらしい。ちょうどその頃、さきに移住していた岩波菊治が「アリアンサ短歌会」という勉強会を開いていた。そこで岩波に師事し、彼が選者をする「日伯新聞」の歌壇に投稿し始めた。また移住地の文芸愛好家（岩波菊治、俳句の^生木村圭石、佐藤念腹）が創刊した日系コロナ最初の文芸誌と現在言われている「おかぼ」にも投稿した。サンパウロ市に移転していた一九三六年、武本は「サンパウロ短歌会」創立に参加し、その二年後短歌誌「椰子樹」創刊に参画する。一方、岩波菊治もまたサンパウロ近郊に（病後の保養もあって）移り住んでいたから同誌創刊に参画し、その選者となる。しかし「椰子樹」は戦争のためにより十一号で廃刊に追い込まれている。敵国となった日本に対して、伯国は日本語の使用禁止、日本語の新聞雑誌はもちろんのこと、移住地からの移動、日本人の集会まで違法の対象とした。取り締まりは非常に厳しくなり、この時代多くの日系人が獄に繋がれたり屈辱を舐めさせられたりする苦難の時代に遭遇した。岩波菊治もスパイ容疑をかけられ一九四二年収監されて、短歌誌や書籍、作歌ノートなどを押収されて遂にそれは手許に返って来ることはなかったという。

収監こそされなかったが、武本由夫もこの例外ではなかった。当時新婚の武本は、日本外務省が設置した日本語学校の総元締めともいえるべき「文教普及会」に勤務していたが、戦争と共に閉鎖され、同時に日本語新聞社なども閉鎖されて、サンパウロを追われるように一九四一年モジ・ダス・クルーゼス市に移転した。そこで養鶏を業としながら、則近正義（岩波、あと武本に師事）らと「モジ短歌会」を創立し短歌の研鑽を続けた。

武本由夫の真骨頂は、日本語の禁止、日本人の集会などが禁止されている中、ひそかに「林泉短歌会」という歌会を継続したばかりか、「林泉」という手刷りの短歌誌を三号まで出したことであろう。

戦争がおわり、一九四七年（昭和二十四年）「椰子樹」が復刊されるに至るその中継ぎとして、「林泉」存在の意義を評価する人達も多い。おそらくは中継ぎ以上に、「林泉」は重い意味を持っているのかもしれない。

一九八三年一月二日早暁、武本由夫は逝った。パース墓地に埋葬される時に武本に兄事してきた安良田済が墓前で読んだ弔辞の一節に、「人間が追求するものに永遠と歴史の二つがあります。この二つのうちで、われわれが戦いとうとするものは歴史です。それは、永遠というものには単に希求の次元にしか存在しないのに対して、歴史は人間的次元のものであって、確実に手でふれることが出来るからです。しかし、その歴史も芸術活動によって充足されないかぎり、空虚感から逃れることができません。そのことは、貴兄が芸術的創造こそ人間存在の理由であり、人間の正史そのものとして、それを実証するために文学に一生を賭け、文学と心中しても悔いなかった行動からもうかがわれます。」とあったが、荒蕪の中で手ずから文化を育て上げてきた人達の言葉であるからこそ、一層の現実味を帯びて迫ってくるのである。武本はいつかコロニ

アの文学史を完成させようと志向して果たせず、文学の歴史そのものを生きた人間であったように思う。いや、武本だけに限らず、コロニアの人達のひとりひとりの人生がそのまま歴史を創造していると日本の自分に感じられてならないのは、コロニアに生きる人達の幸福と不幸を同時にそれが象徴しているからかもしれない。

III

ふるさとの信濃の国の山川は心にしみて永久とほに思はむ

岩波 菊治

ブラジル、サンパウロ市の郊外イビラプエラ公園、伯国独立四百年記念として建てられた「日本館」の庭にある歌碑（一九五四年九月十一日除幕）の短歌である。同短歌の碑は菊治が帰ることを夢にまで見た日本でも建立され、彼の死後四三年目の一九九五年四月八日に除幕式が行われている。すなわち故郷信濃の国、諏訪湖畔百景園に見ることが出来る。

「コロニア短歌の父」とも称せられている岩波菊治は、一九二五年（大正十四年）マニラ丸でブラジルに渡った初期移民で長野県上諏訪市の出身である。彼は一九五二年、五四歳で世を去ったが、ブラジル日系人社会に短歌による文芸活動の大きな業績を残している。

岩波菊治は生涯を、果樹・野菜栽培を主とする農夫として生きたが、彼が晩年の十年間住んだ安住の地、モジ・ダス・クルーゼスの原野には彼の「桃陰山房」と称して歌会などやっていた家が今も存在する。耕した大地は再生林のごとくなり、家に至る地道には、彼の名前を冠して「ルア・キクジ、イワナミ（岩波菊治道路）」と、功績を讃えて命名された道路標識が立っている。

筆者が取材に訪れた平成七年（一九九七年）夏には既に菊治の耕して

いた畑は灌木に消え、植えた桃の木などは朽ち果てるにまかせ、草ぼうぼうの野に辛うじて菊治の一家が農業を営んでいた跡がしのばれるばかりであった。しかし、モジ・ダス・クルーゼスの公園にもまた彼の短歌を顕彰する歌碑を見いだす。

イタベチの山の頂に雲流れ雨期明けし空澄みとほりたる

ブラジルの短歌史について語るには、菊治の名を措いて語ることは出来ない。同時にそれはブラジルの短歌が辿る写生短歌の方向がすでに菊治によって決定づけられていたといっても過言ではなからう。というのも、一八九八（明治三一）年、長野県上諏訪に生まれた菊治が、幼年時代をおくった明治三〇年代、浪漫主義文学運動は特に詩歌に於いて全盛期を迎えていたが、自然主義文学の台頭とともに浪漫主義短歌も衰微し、遂に明治四一年勢威を誇った「明星」も廃刊の憂き目に遇っている。その間、菊治はまだ小学校も卒業していなかった関係上、「明星」派短歌の洗礼を受けたとも思えないばかりか、短歌に勤しむようになった大正の初年には、すでに「アララギ」派が歌壇の主流になっている頃であった。また、伊藤左千夫の死後（大正二年没）島木赤彦が大正三年教職を辞して上京し、「アララギ」の編集に全力を傾けその経営を軌道に乗せたこともあって、岩波菊治が、同郷の大先輩である島木赤彦に私淑し「アララギ」に入会（大正七年）するのも自然な成り行きというものであったろう。

岩波菊治が自宅を「桃蔭山房」と称したりしたのも、当時、桃を栽培していたとはいえ、それは島木赤彦の「柿蔭山房」をもじってつけたものと思われる。島木赤彦は客観写生を打ち立て深い凝視による沈潜した寂寞の歌境に到達したと世に言われているが、岩波菊治もまた師の赤彦

の短歌を理想として、移住地の若い人達を指導しようとした。のち、コロニアに圧倒的に「アララギ」派歌人の多いのはその理由による。

一九三〇年、菊治は日伯新聞に赤彦が死の二年前（大正十三年）に発表した評論「歌道小見」の要旨を紹介している。翌年、アリアンサ移住地でコロニア最初の文芸機関誌「おかぼ」が生まれる。「おかぼ」は、岩波菊治、俳句の木村圭石、佐藤念腹（ともに「ホトトギス」派の高浜虚子門下）等が「おかぼ会」を作って短歌、俳句の創作研鑽をしていたのが母胎になった。彼らのように日本にいる時から詩歌を作っていたものが、移住地の文芸指導者になっていく。その際に重要な役割を果たしていたのが邦字新聞の文芸欄であった。邦字新聞は文芸欄の中に、各紙「歌壇」を設けて菊治のように日本ですでに勉強してきた人をその選者に選んだのである。

一九三七年、岩波菊治は、病氣療養をかねてカンピーナス方面に移転している。アリアンサ移住地の青年会のスポーツ、修養各部長（二八年前後）を務めたり、産業組合専務理事（三一年）の要職にいたりして村の政治、文化面で活躍してきたその心労がたたったのか、過労から体をこわしたのである。アリアンサは謂わば大正七年武者小路実篤が九州日向（宮崎県児湯郡木城村石河内の字城）に作った「新しき村」のブラジル版そのものであったのだ。後で述べるが、そこはキリスト教ボランティア団体の拓いた理想主義的な「自立と共同」を謳った、他の移住地とはちょっと雰囲気違った移住地であった。ブラジルでは教会に行っただ形跡はみられないが、岩波菊治もクリスチャンであった。アリアンサはサンパウロから約六〇〇キロ離れた、当時汽車で二日間を要したという遠隔の地であった。菊治は止むなく病気の為にサンパウロ近郊に移り住むことになる。菊治の「理想の村」建設の夢は心ならずも潰えたのだ。

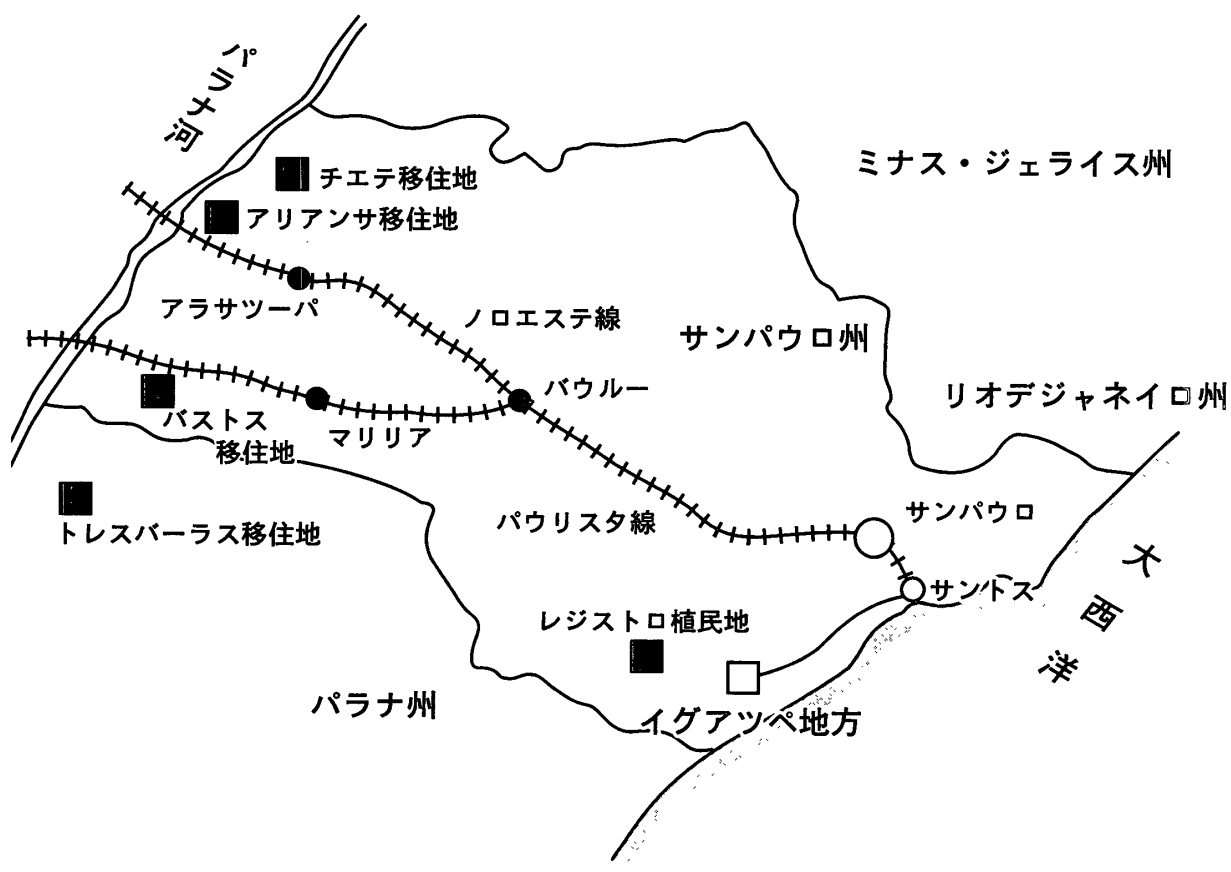
その頃、サンパウロには武本由夫はじめ菊治の若い歌の弟子達が都会に移り住んでいたし、また「短歌会」には時のサンパウロ総領事坂根巖（本名・準三、ペンネームを四つ持つ）、リオ正金銀行支店長椎木文也（共に短歌を詠んでいた）も参加していたので経済的な支援もしようとの話も出たりして、短歌雑誌を創刊しようという機運は熟していたのだった。

岩波菊治が近くに移ってきたことも発刊の弾みとなって、「椰子樹」は一九三八年一〇月二〇日創刊号が出ることになった。岩波菊治は阿部青杜と共に歌壇選者となっている。当時マリリア、バウルなどサンパウロ近郊にあった地方短歌会の会員もすべて「椰子樹」の会員に加わり一九四一年大戦によって廃刊に追い込まれるまで十一号を発刊している。六年間休刊した「椰子樹」は、一九四七年復刊し、現在に至っているのである。

IV

ここで、本稿の目的たる短歌の濫觴を辿るに立ち返れば、どうして文芸が遠く離れた遠隔の地に発祥し、それが都会で結実したのか、その原因に触れないわけにはいかない。むしろ本来は都会で生まれた文芸活動が、田舎の方へ徐々に伝播して行くという形態をとるのが普通であろう。サンパウロ近郊には、アリアンサより前に始まった大規模移住地イグアツペ植民地があったし、距離的な遠近を問わねば国策会社（現地法人名ブラジル拓殖組合）によって拓かれるバストス移住地、チエテ移住地、トレスバラス移住地（アサイ移住地と改名）などがあった。それなのにどうして総ての文芸が^注アリアンサから発祥しなければならなかったのか。その疑問に答える必要があるうか。

当時のアリアンサを知るには、現在もその面影を残している、あのバ



レー団で有名な「コムニターデ・ユバ」(弓場協同農場)についてみれば、おおよその検討はつく。この協同農場はアリアンサに移住してきた青年達によって、「祈ること、耕すこと、芸術すること」をモットーとして、お互いになんの制約もない人間らしく生きることを志向し、「理想の村」建設を目的として作られたのである。中心になった人物は、兵庫県西宮市名塩出身の弓場勇である。彼はトルストイの人道主義の教えに傾倒し、一九二六年(昭和元年)二〇歳の時に、村長を務めた父親を説得して一家をあげてアリアンサにやってくる。勇は兵庫県三田中学の野球部剛球投手として夙に名を近在に知られたスポーツマンでもあったそのリーダーシップと人を魅了する強烈な個性が、ユバ協同農場にアリアンサの青年達を惹きつけたという。弓場に共鳴して農場開拓に当たった青年たちのうち、世間に名を知られた人の関係者では、新渡戸稲造の甥の太田英俊がいるが、若くして病気で死んでいる。また、画家など芸術家を支援したことで知られる相馬黒光の子で、文雄も理想の為にこの地に移住していたが、後アマゾンに行き一年ほどで病死した。彼等はキリスト教ボランティア団体「日本力行会」のメンバーである。クリスチャンであった相馬愛蔵・黒光夫妻(新宿中村屋)も力行会を熱心に支援したことはよく知られている。

ところで弓場勇が移住を決意した憧れの大地アリアンサは、どのような移住地であったのだろうか。岩波菊治も武本由夫も、最初第一アリアンサ移住地に入植している。菊治は弓場より一年前の大正一四年に入植した。アリアンサのあるノロエステ線(葡語で西北の意)はサンパウロから西北へ延びる六〇〇キロ離れた土地であるが、この沿線には当時日本人の若者が多数農業移民として入植した。

アリアンサは一九二四年(大正十三年)に開設された大規模移住地で、運営は移住者の組合によるものだった点が、他の移住地と大きく異なる

ものである。民間の運動によって開設された移住地なのである。アリアンサの名称も葡語で協同とか盟約とかを意味するように、各人の自立と協同の精神を重んじていたようで、移住地の運営委員などを当時としてはめずらしい選挙で選んでいる。組合運営の中核になる自治会(アリアンサ会)の初代責任者に弓場為之助(勇の父親)が選ばれている。移住地という名称もそれまでは植民地と呼んでいたものを、彼等が初めて使ったもので、それは出稼ぎではなく永住するという意味からだったという。

実際にアリアンサの開設にあたって力を尽くしたのは、「信濃海外協会」の創設に奔走した輪湖俊午郎と「日本力行会」会長である永田稠(しげし)の二人であつたろう。土地の選定からブラジル政府との折衝土地購入の手続き、土地の区割り指導などの移住地建設には、現地理事を務めた輪湖があつた。日本力行会の永田稠は長野県内の有力者に資金集めの協力を仰いだ。当初は本気で誰も相手にしなかつたようだ。永田は長野県諏訪の出身であり、輪湖は同じく南安曇郡出身である。

輪湖は十六歳の時に英文学の勉強をするため北米に渡っていたが、一九一三年加州で排日法案が通過したことに怒ってブラジルに再移住した人物である。ジャーナリストの経験は北米で「ロッキーマガジン」で、ブラジルでは一九一六年(大正五年)「日伯新聞」を金子保三郎と共に創刊した。彼は移民の苦難やその現状を記者の目からつぶさに見た。一方の永田もキリスト教系のボランティア団体「日本力行会」の一員として、北米加州で移民に対する支援活動をしていた関係で、移民の苦しみや矛盾などを見てきていた。その二人がブラジルのレジストロ植民地で会い移住の在り方について意見交換をしたことが、後のアリアンサ移住地建設の出発点になったと言われている。

日本力行会の沿革をみると、永田稠は大正九年、文部省の委嘱をうけて在外子弟教育の調査のために北米、中南米を一巡している。二人が会っ

たのはその時であろう。同沿革に、一九二四年（大正十三年）、力行会はブラジルに二五〇町歩の農用地を入手したとあるのが、すなわちアリアンサ移住地の開設である。信濃海外協会は思うように資金が集まらなかったため輪湖は当局と交渉して三年年賦にしてもらい、五三二四ヘクタールの用地をアリアンサに購入することに成功した。また渡部昭（伯爵、昔諏訪の殿様）はブラジルの第三アリアンサに二〇〇アールの土地を購入したとある。その土地を力行会にただで貸した。正式にはアリアンサは信濃海外協会が拓いた移住地であるが、実働面では日本力行会が開拓したのである。ちなみに岩波菊治も、アリアンサ開設の一年前、一九二三年（大正十二年）に日本力行会に入会している。新渡戸稲造も協力し、永田は日本に力行会経営の海外学校を設立して青年達を教育し、アリアンサへ送り出したというわけである。

一九二四年（大正十三年）移住地の自治を原則に置いた新しい土地、アリアンサ移住地は開設された。これは土地も渡航費も国が持つという国策事業とは違って、日本国内でお金を払って土地を買い移住していくという方式であったので、移住者には中産階級が多く、また永住するつもりの人が多かった。ところが、日本の新しい村もそうであったが、理想はあっても実際に農業をした経験のない人達が大半であったところに所期の目的を果たしえない現実があったということである。「家は立派だが、仕事はダメだ」とか、「アリアンサで金持ちになったものはいない」とか、揶揄されるところがあったようだ。その反面、学者や医者（伯国は水質によるのかカフェの習慣でか歯の悪い人が多いので歯医者も）多く出ているという。

文芸はアリアンサからというもの、右に述べたような背景があって他の移住地と比較して良き指導者に恵まれていたこと、それと移住者自身

にも文芸を受け入れる素地のようなものを日本ですでに教育として身につけていた人達が多かったという点にある。彼等一世はやがてアリアンサから出て行き、日本語学校の教師となり邦字新聞の歌壇選者となりあるいは農業の傍ら各地で歌会を組織し、短歌を広めて行ったのである。日本人にとって五音七音という日本語の韻律は生まれながらにして極めてよく馴染み、古来から喜怒哀楽の感情の発露にこれほど適した表現形式を見出すことも難しい。彼等は短歌を詠むことで、異国での受苦によく堪え、自らの心の慰撫として、如何に再生への道を歩み出す助けと為すことが出来たか、を思う。

男の子ならば水夫となりても奥津城の土古りぬ間に帰らむものを

ゆき子

初期移民の作であるが、自分の親を遥か日本で亡くしたのに帰れぬ哀しみを詠じたまさに慟哭の歌である。短歌を詠むことで、歌があったからこそ何とかやり過ごすことのできる切なさだっているのだ。胸底にあるどうしようもない思いに短歌という形式を与え流露させることで、碎けそうになる心も繋ぎ止めることが出来たであろう。このような歌を読めば、短歌が如何に移民たちにとって心の支えになったか想像するに難くない。

現在の状況を見ると、活躍する歌人たちは、一世が没しほとんどが準二世の時代になっている。子供の頃まだ碌に物心もつかないような年頃にブラジルに渡った人も居れば、小学校を中途で退学して両親に連れて来られた人もいる。その境遇を素直に受け入れて生きてきた人もおれば、その自分の運命を恨み生涯引きずってきた人もいる。準二世の特異性が、自発的な意志で海を渡った一世、国籍や考え方もブラジル人となった二

世とも違う、その点にあったことに留意する必要がある。彼等は成長するにつれて日本でもないブラジルでもない己の心を埋めるもの即ちアイデンティティを無意識に求めたであろう。言い換えれば、自分の存在証明を「日本」に求めたのだ。古来から連綿と続く民族の血ともいえる和歌を学び、日々倦まぬ努力を続けて研鑽を積むことが、純粹な「日本」に回帰する道であった。学校に通う機会を失った彼等が、昨今の日本の生半可な大学生など足許にも及ばない高度な国語力を身につけていることは、瞠目に値するほどである。荒々しい風土の中で、日本語への飢餓感、勉強したいのに出来ない焦燥感、無念さから、読書につぐ読書によって深い知性の人になった準二世は多い。彼らが「椰子樹」に書いているエッセイや評論の類を読めば、短歌が趣味や娯楽とは似ても似つかぬ真摯な彼等の人生のものになっている状況が読み取れるのである。襟を正すことなく読めない感がするのは、筆者のみではあるまいと思う。

紙数の都合もあり、最後に移住者達がどれほど短歌を抛り所にしてきたかを、次に数字で一例を示して、筆を擱きたい。

移民七〇周年記念事業として椰子樹社が中心となって刊行した「コロニア万葉集」(一九八〇年刊)には、戦前作品九九一首、戦後作品五六四三首の合計六六三四首が収められている。作者数は戦前二六九人、戦後一一〇九人。

なお選考対象作者数は計一五九九人、同作品数、一万五千六十二首であった。

注1

各移民会社の各移民名簿サントス港入港者の来伯人員数(香山六朗「移民四〇年史」)

年代	来伯人員数
1922 (大正11年)	528
23	516
24	4985
25	4912
26 (昭和元年)	7639
27	10050
28	10812
29	11515
30	12600
31	5332
32	15023
33	21000
34	21702
35	6400
36	5373
37	4642
38	2552
39	1294
40	1556
41	1350
42	0

日伯国交断絶空白時代

注2

木村圭石、本名貫一郎、一八六七〜一九三八。新潟県出身。高浜虚子門。本職は東大工学部出身の橋梁工学専門家。サンパウロ州チエテ河に架けられたノーボ・オリエンテ橋(一九七二年のチエテ河のダム化によって水没)の設計者として知られる。(アリアンサに生きた芸術家たち「アリアンサ通信」)

佐藤念腹、本名謙二郎、一八九八〜一九七九年。新潟県笹神村出身。高浜虚子に師事、ホトトギス同人。二九歳の時にアリアンサ移住地に入る。「パウリスタ新聞」の俳壇選者としてブラジルに俳句を広めた。渡伯に際して、高浜虚子は錢に「畑打って俳諧国を拓くべし」の句を贈った。

注3

日本語新聞
発行部数は一九三三年頃最大のもので八〇〇〇部どまりであった。一九三八年

ころには以下に示す部数になる。そして主要紙は日刊になった

ブラジル時報	(創刊)	一九一七年	週二回の発行	十二ページ	(一九三八年時)
日伯新聞		一九一六年	週一回	八ページ	一七〇〇〇部
聖州新報		一九二一年	週一回	八ページ	一九五〇〇部
日本新聞		一九三二年	週一回	六ページ	九〇〇〇部
アリアンサ時報		一九二四年	週一回	四ページ	五五〇〇部

(アリアンサ時報は一九三七年アラサツバに移り日伯協同新聞と改名) 他紙はサンパウロで発行。「ブラジル日本移民八十年史」による。

注4

岩波菊治の年譜については「暎の中の先歿歌人像」(武本由夫「コロニア詩歌十六号」一九七六年十一月)、「岩波菊治―短歌に辿る一移民の心の軌跡」(清水益次著サンパウロ人文科学研究所刊)一九九三年六月。清水益次は準二世のサンパウロ在住のジャーナリスト。一九五九年八月に「椰子樹」関係者により「岩波菊治歌集」が刊行されている。収録歌数一九九六首。

注5

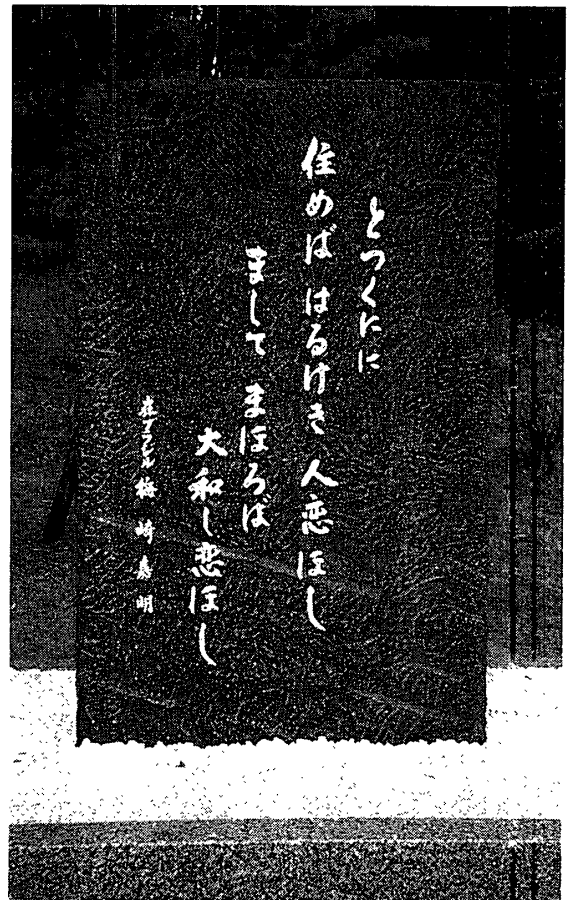
アリアンサ移住地は「ブラジル信濃村」と呼ばれるが、長野県は全国から入植者を募集したので、長野県出身者は二〇%から三〇%止まりであった。信濃海外協会が開設した第一アリアンサ移住地(大正十三年)、同協会と鳥取海外協会が開設した第二アリアンサ移住地(大正十五年)、同年に熊本海外協会が開設したヴィラ・ノーバ(新しい村)移住地、また信濃海外協会と富山

海外移民協会が共同開設した第三アリアンサ移住地(昭和二年)、これらの移住地が民営大移住地で、それらを含めてアリアンサ移住地と呼ばれている。

政府は海外移住組合法(昭和二年)を作り国内の産業組合法に従い土地購入の低金利融資、病院、文教施設などへの助成金を支給することとしたが、民営のアリアンサに対してはその適用を除外した。ために経営危機に陥り順次経営は破綻。国策の海外移住組合法(現地名、ブラジル拓殖組合)にその経営を委ねるようになる。一九三八(昭和十三年)、移住地行政をめぐって統合に反対していた信濃海外協会も遂に経営権を「ブラジル拓殖組合」に委譲し、独立民営に終止符を打った。その後、現在では国策の大移住地が殆ど大都会への人口移動により消滅したのに対しアリアンサ移住地は現在も日本文化と日本語を濃く残しているのである。



モジ・ダス・クルーゼスにある岩波菊治の墓
(1997年9月訪伯時に筆者撮影す)



斑鳩町「ふれあい交流センター」にある梅崎嘉明の歌碑
(2002年4月17日歌碑除幕式筆者撮影)



ブラジル日系人の発刊せる歌誌及び総合文芸雑誌類